

明治・大正期の富山県内における 「野外における教育」と「林間学校」

—富山市内の小学校における実践を中心に—

野口 穂高

キーワード：野外における教育、林間学校、初等教育、明治期、大正期、富山県、富山市

【要旨】 本論文は、明治期から大正期にかけて、富山市内の小学校が実施した「野外における教育」や「林間学校」を対象に、実態や特質を明らかにするものであった。富山県内では、明治中期から大正期にかけて「野外における教育」の経験が蓄積されたほか、「林間学校」や代替となる活動の必要性が共有されるなど、「林間学校」を実施するための基盤が形成されつつあった。

結果、1921年度の富山県による補助金の支給を契機として、県内の小学校を中心に複数の学校が、「臨海教育」を試験的に実施するに至った。これらの実践の内、富山県師範学校附属小学校が実施した臨海教育及び富山市内各公立小学校が合同で実施した臨海教育について、その目的や活動内容を検討した。結果、両実践においては、水泳練習などの鍛練的な活動が中心であったほか、地域的な教材を生かした学習活動も展開されるなど、大正期に政府や地方行政が奨励した身体虚弱児童向けの養護を中心とした実践とは異なり、一定の独自性をもつ「林間学校」であったことが明らかになった。また、富山県内の「林間学校」の量的・質的な発展の契機としても位置付けられるなど、両者の実践の意義も明確にした。

はじめに

明治後期から大正期にかけては、ドイツの「ヴァルトシューレ (Waldschule)」や「フェリエンコロニー (Ferienkolonien)」、イギリスやアメリカの「オープンエアスクール (Open air School)」など、欧米で実施された各種の「林間学校」¹が国内に紹介され、「林間学校」を中心に「野外における教育」²が流行した時期である。欧米の「林間学校」は、結核患者向けの海浜療養所を出発点としており、「身体虚弱児童」を養護し、その健康を増進することを主目的に発展した。虚弱児童が増加していると認識された国内でも、明治中期から後期にかけて、留学生や医療関係者を介して海外の「林間学校」が積極的に紹介され、さらに、大正初期から中期にかけては、文部省を中心とした政府の奨励策もあり、各地で試験的な「林間学校」が行われた³。

とりわけ、「林間学校」の実施が全国的に増加するのは、1921年3月の帝国議会において、虚弱児童向けの「林間学校」の実施を奨励する「林間学校奨励補助ニ関スル建議」⁴が可決されて以降である⁵。富山県内においても、1921年度に富山県師範学校附属小学校や富山市内の小学校、上新川郡太田小学校、高岡市の高岡幼稚園により「林間学校」に類する実践が初めて実施されており、「建議」を契機として実施に至ったと考えられる。

また、上述の経緯により「林間学校」が受容されたため、国内における実践の多くも、身体虚

弱児童向けに実践されることが期待され、形態・内容も欧米の虚弱児童向けの施設・実践をモデルに実施することが奨励される。この結果、軽度な「運動」、給食による「栄養（營養）」補給、慰安的な生活を通じた「休養」を主軸とするなど、全国で一定の形式を共有しながら実践が展開された。一方で、財政的な支援が十分ではない明治後期・大正期の「林間学校」は、受益者負担を前提としたために、虚弱児童の中心を占めた貧困層の家庭の児童が参加しづらい状況にあった。このため、富裕層の健康な児童向けに、心身の鍛錬や学習を主目的とする実践が行われることや、虚弱児童と健康な児童が混在して実施されることも多かった。すなわち、虚弱児童向けの養護中心の実践が奨励されつつも、実態としては、多様な教育目的に基づき実践が展開されていたのである。とりわけ、香川県や京都府など、欧米型の「林間学校」の影響を受けながらも、明治後期から大正初期に地域内で実施された「野外における教育」を基盤に海外の実践を受容し、独自性をもつ「林間学校」が展開された事例もみられる⁶。富山県内においては、どのような過程をたどり「野外における教育」や「林間学校」が試みられ、発展を遂げたのであろうか。

ここで、明治期から大正期における「林間学校」や「野外における教育」の先行研究を検討する。先ず、「林間学校」についての研究を見れば、虚弱児童対策として奨励された背景もあり、特別支援教育の観点からの研究が中心である⁷。だが、先に述べたように、地域独自の「野外における教育」実践と結びつき、多様な教育目的をもって実践された事例もあるため、今後は、体験的な教育など、児童の学習活動の観点からの研究を進めることも重要と考えられる。さらに、研究対象の地域も限定されており、「林間学校」の全国的な発展の動向も明らかでない⁸。このため、さらなる事例研究を積み重ね、各地の実施状況を明確にする必要があるといえる。また、「野外教育」や「野外における教育」の史的研究も十分ではなく⁹、富山県内の事例についても、その史的発展の概要¹⁰や、立山登山の特質¹¹について論じられるに留まっている。特に、本論文で対象とする富山県内の「林間学校」実践については、『富山県教育史』で概要が明らかにされているだけで、その検討も十分ではない¹²。そこで、本論文では、明治後期から大正期にかけて富山市内の小学校が実施した「野外における教育」や「林間学校」の実態及び特質を究明する。

史料としては、富山県立図書館、高岡市立中央図書館が所蔵する学校関連資料や『富山教育』などの教育雑誌、『富山日報』『高岡新報』『北陸タイムス』等の新聞記事を分析の対象とする¹³。

1. 明治期・大正期における富山県内の「野外における教育」

(1) 明治期・大正期の富山県内の「野外における教育」の実施状況

本節では、主に明治中期から後期、大正期における富山県内の教育界の動向や、「野外における教育」の実施状況について検討する。

明治20年代から30年代の富山県においては、学校行事の発展に伴い、遠足運動、校外教授、修学旅行、学校園などの「野外における教育」が実施されていた。とりわけ明治30年代後半には、校外教授・修学旅行などが量的発展を遂げると共に、水泳や夏期の学校召集が実施されるなど、大正期の「林間学校」のプログラムを構成する種々の教育活動や類似する教育活動について、一定の経験の蓄積されたことが分かる。さらに、これらの経験の蓄積は、量的のみではなく実践面からも確認できる。すなわち、明治後期から大正初期の富山県では、理科や地理歴史に関する知

識を体験的に学ぶことや、心身の鍛錬を主目的に位置付けた「野外における教育」として、校外教授、遠足、修学旅行、雪合戦、冬期の遊戯などが、一定の研究や質を伴いながら展開されていた¹⁴。加えて、1913年の『富山県教育雑誌』では欧米の「林間学校」についても言及し、その実施の必要性が論じられるなど、野外での体育や学習の重要性が主張されるようになっていく¹⁵。

大正後期になると、富山県内でも体育を奨励する機運がさらに高まっている様相が窺える。たとえば、1921年8月の『北陸タイムス』の記事では、「富山県では、近時大に体育熱が向上し、至る所に運動競技の気分が充ち溢れて来たやうである」と述べ、さらに体育的施設を拡充するように求めている¹⁶。また、富山市内の各小学校において、夏期休暇中の体育的な教育活動が展開されたことが報道からも分かる。たとえば、1919年から21年度にかけては、学校の運動場を開放¹⁷して子どもを遊ばせた事例や、児童を引率して避暑旅行をした事例、近郊の林間や仏閣で教科学習や運動を実施する計画が複数掲載された¹⁸。一例を挙げれば、それは次のようである¹⁹。

此休暇中各小学校ではいろんな催しをやり或は学校では児童を毎朝五時頃学校に集めていろんな事をさせ或る学校では学校の運動場を全部開放して児童は勿論学校付近の子供や子守を遊ばせるやうにし又或る学校の校長は児童中裕福な家の子供十名ばかりを連れて夏期学校的に地方へ避暑に行つてゐる等其他何に彼といろいろ催しをやつた学校がある相だ。

上の記述からは、「朝起会」や「学校開放」などの夏期休暇中の教育施設が一定程度実施されていたことが分かる。また、富裕層の児童を対象に、「林間学校」に類する活動を実施した学校があったことも窺える。その他、県内の各中等教育機関の登山記事や水泳に関する記事が盛んに掲載されるなど、夏期の体育的な活動が活発に実施されていた。加えて、黒部立山など全国でも著名な山岳を擁するが故に、各地の学校や団体が富山県を訪れ、その登山に関する記事が掲載されたほか、夏期旅行に関する記事も掲載されるなど、県民の間でも自然の中での生活や体験的学習の意義が共有されていたと考えられる²⁰。

さらに、第一次世界大戦後の国内では、社会情勢の変容に対応するため、理科教育の拡充や教育方法の改革に取り組んでいる。その様相を『富山県政史』は「其の他作業教育・芸術教育・性教育・メンタルテスト・プロジェクトメソッド・ドルトンプラン等種々なる教育思想が紹介せられ、児童生徒の学芸会、林間学校、臨海教育・低脳児教育、学校の社会化・作業化・美的化等各種の施設を見、我が教育界は大いに多事を極むるに至つた。」と述べる²¹。とりわけ、富山県においては、教授の形式化を批判し、児童中心主義的な教育の実施に熱心であった。具体的には、児童の実力養成、自学自習意欲の向上、教材の精選に取り組んだほか、教科連携、訓育や体育の生活化等が実施されている。さらに1922年には、富山市内の小学校が「秋季学年制」を実施するなど大胆な改革にも取り組んでいた。先に見た大正後期の体育奨励策や夏期の体育的施設・活動の拡充は、こうした児童中心主義的な教育の一環でもあった²²。また、児童中心主義的な教育の実施は、教育方法改良の目的から学校建築や自然環境の教育的効果に注目し、新たな活動の展開や環境の整備につながる側面もあった²³。師範学校附属小学校を例に取れば、1920年度には「児童博物室」「児童図書室」「児童園」の設置などが進められ、教育環境の拡充が図られている²⁴。

以上、大正期の富山県内では、明治中期からの「野外における教育」活動の経験の蓄積や、大正期における夏期休暇中の運動・学習を目的とする野外での教育活動の展開、自然環境の教育的効果への注目の高まり、児童中心主義的な教育方針の採用など、試験的な「林間学校」を実施するに至る実践的な基盤が十分に形成されていたと考えられる。

(2) 1921年度における「臨海教育」の実施

さらに、帝国議会において「林間学校奨励補助ニ関スル建議」が可決された1921年度には、富山県が「林間学校」を奨励し、その実施のために県内の各小学校に対し補助金を支給する動きがあったことが確認できる。報道によれば「本年に於ける、県内各地の状況を見るに、県当局の方針に基いて、臨海教授を試みんとする所が、少なくないようである」とあり、21年度に県内の複数校が「臨海教育」を実施した背景には、県の方針があったことが分かる²⁵。『高岡新報』でも「富山市では県の勸奨に依り」「臨海教育実施計画ある事は既報の如くで」²⁶と報じているように、附属小学校及び市内小学校の教員らは、県の奨励策を受けて臨海教育を実施することにしたのであった。また、費用としては、1921年度の富山市内各小学校の合同による臨海教育の場合、富山県から150円の補助金を受給し、ほかに市費から約300円を支給されている²⁷。

ただし、『高岡新報』は、高岡市の小学校の動向について、「近頃各学校にては夏期海浜教育や林間教授に就いて大に研究の眼を向けられて来た、本県庁にては曩に高岡市役所を通じて高岡市の各小学校に対して児童の臨海教育を懲遷して来たが小学校長会議の結果何分初めてのことで慎重なる研究もいり経費が先に立つ問題なのだが県よりの補助費が余り充分でない為に遂にやらないことに決めたのである。」と報じている²⁸。この報道からも分かるように、高岡市の各小学校にも高岡市役所を通じて県から補助金の給付と実施を奨励する通知があったが、補助金の額が十分でないため実施には至らなかった。また、附属小の実施報告でも「附属小学校兼ねての希望は県の補助金に依り兎も角も一通りの計画を踏んで終了することが出来た。経費の都合と最初の試みなるが故とで其期間並びに児童の選択其施設規模等に於て考慮の余地多々あつた事と思ふ。其研究に於ても食品の科学的調査や、疲労並びに血液検査の如きも必要であつたらうが、之等は他日の問題として此匆卒の間に物した雑録と他学校の諸報告とに依り何等かの参考資料が得らるるならば幸とするところである」と述べており、経費の不足により十分な調査研究が難しかったことが分かる²⁹。だが、「附属小学校兼ねての希望は県の補助金に依り兎も角も一通りの計画を踏んで終了することが出来た」と述べているように、県の奨励と補助金の支給を受けて、富山県初の臨海教育が実施されたのであり、県の施策には一定の意義があったと考えられる。

なお、1919年の『富山県教育会雑誌』³⁰では、同年6月に開催された学校衛生主事会議における赤司普通学務局長の訓示が掲載され、「林間学校」実施の必要性も紹介されたほか、1920年には『富山日報』や『高岡新報』において「林間学校」実施を求める記事が掲載されており、建議の可決以前からも「林間学校」の需要があったことも窺える。実施を求める理由としては、夏期休暇の有効利用や虚弱児童への対応、児童の健康増進などが挙げられている³¹。

また、1921年度には、富山県内で夏期体育的施設が複数計画されている。たとえば、『高岡新報』は、「海に山に其適する所を選んで活躍せねばならない市内各小学校は例年其夏季主として休暇中に於ける体位向上施設をなし此好機を逸せぬ様努めてゐる」と高岡市の小学校の動向を伝

える³²。具体的には、平米町校では、学年別に近郊六里以内で半日旅行を数回実施する予定であり、博労町校では朝起会や近郊遠足数回を計画、宝塚町校では、4年生以上の有志を対象に、毎日夜明け前に射水神社参拝、公園広場で体操を実施予定、油町校では、6学年男子を対象に休暇中毎朝、授業2時間を実施する他、川原町校では、10日間続けて半日の耐熱旅行を実施する予定であった。このように、富山県内では、「林間学校」やその代替となる活動の必要性が一定程度共有されており、こうした意識も県内初の臨海教育の実施を後押しすることになったといえる。

2. 富山県師範学校附属小学校の「臨海教育」

(1) 臨海教育の概要、目的、参加児童の特徴

本節では、1921年に富山県師範附属小学校（以下、附属小と略記する）が実施した「臨海教育」について、主に『富山教育』第94号³³掲載の記事を参照して実施状況を明らかにする。

附属小の臨海教育は、1921年7月21日から30日までの10日間にわたり、氷見郡太田村の雨晴駅と島尾駅間に位置する海岸で実施された。附属小の教員らが臨海教育について報告した記事では、太田村の特色として「海水清澄水温適度にして潮流極めて緩し」「遠浅にして海岸より五十間位沖まで水深四尺」「海底は一面細かな砂地で危険物無し」「俗界を隔り活動自由」「汚水の流入無く衛生上極めて有利」「物品の需給容易にして運搬に便なり」「附近に山林田畑多く生活に変化を添ふ」「名所旧跡所々に多く遠足・研究に便なり」などと指摘している³⁴。また、同記事では太田村の地域的な特色の総括として「位置と云ひ、海底海水と云ひ、衛生上の問題と云ひ、風紀と云ひ、心持と云ひ児童の臨海教育場としては誠に詭向の所であつた」とも述べており、海岸や海水の性質、安全性や児童の生活・学習上の利点、衛生面、風紀などを重視して実施場所を選択したことが分かる。ただし、「近くに医師の便なし」ともあり、医療機関が十分でなかったことも窺える。新聞報道によれば、当初は四方町の四方海岸での実施が有力であったが、海浜の衛生面に課題があり³⁵、太田村での実施に決定したという。この事から、条件の中でも、特に海水や海浜の衛生面を重視していたとも考えられる。後述するように、活動の柱は水泳であったため、海水や海浜の衛生状況は無視できなかったといえる。また、医師の便がない状況は、県の学校衛生主事の出張により補っていたと考えられる³⁶。

宿舎は太田村の太田村小学校³⁷を使用しており、二階の大教室3つを寝室とし、「美しい花筵を敷きつめ、新調純白の藁布団を各自一個づつに布き並べ師範学校所有の大蚊帳を吊つて安眠させることになつて居」たほか、「食堂があり遊戯室があり勉強室がある」など、児童の過ごしやすい環境になるよう計画がなされていた³⁸。また、一階には職員室兼事務室や食堂、調理室、遊技場などが設置されたほか、外部には浴場を設置している。宿舎として使用した校舎についても「海岸に近く万事好都合」「高燥地にあり清潔にして便利多し」「村落の中心なるが故に児童看護に都合よし」と説明しており、臨海教育を実施するのに利便性の高い施設であった³⁹。

宿舎に加え、水泳場も整備されている。報告によれば、海中に5間ごとに杭を打って2本の太綱を張り、渚から20間の距離に第一区画を、第一区画からさらに20間沖合に第二区画を設けていた。加えて、第一区画には両端に取りつき場を設け、水泳が苦手な児童の遊び場及び稽古場とし、飛び込み台や浮箱も設置された。この他にも、天幕の脱衣所も設けている。なお、これらの

宿舍や水泳場の設営には太田村青年団が参加するなど、開催地の住民から協力を得ていた⁴⁰。

附属小の教員らが臨海教育を実施した理由としては、「今度子供のための教育施設といたしまして臨海教育を行ふことになりました。御承知の通り臨海教育は子供の体位向上と精神生活の開拓のために著しい効果のあることは教育上世の定説であります。」と募集文書にて述べたとあり、主に「子供の体位向上と精神生活の開拓」における効果を挙げている⁴¹。

また、附属小学校主事の中田栄太郎は、心身の健康増進や学習上の効果など、臨海教育の幅広い意義を主張している。以下、中田の「夏季休業と臨海教育」という記事⁴²を参照し、その目的を検討する。中田によれば、臨海教育は、水泳を通じた筋肉の増強、清潔な空気による呼吸器の健康増進、適度な運動による食欲増進と滋養ある食物の供給を通じた消化器の機能増進、「近視的な学習」からの開放など、「其身体上に及ぼす影響実に多大なものがある」という。加えて、海浜の生活を通じて「海を恐れぬ胆力」が養われ、天然美が「神気を爽快にする」など、精神面での成長もその効果として期待できるのであった。さらに、「海邊生活に於ける自然研究は児童の本性によく合体し、学校生活に於けるそれに比して実に多大の相違がある。海其者の研究から海藻採集、磯採集、田園山地の自然物一として児童の感興をそゝらぬものはない。都市をさけて海邊の大自然に抱かれ其靈感に触れる児童の原人生活ほど楽しく幸福に見えるものはあるまい。」として、学習上においても、学校での学習と比較して大きな利点があることを説明する。

さらに、以下のように述べ、その体験学習としての意義を強く論じている。

海邊に児童の好きな画材や詩材の多いことは其自然の発露に依つても伺はれる。林間に於ける海気を吸ふての休養や体操、遊戯乃至読書談話など一段の興趣を添へる。純朴な村の子供や青年達は心から歓迎して呉れる、事實其地方の人達の好意に依るでなければ、目的を達し得られないことをまのあたり目撃してゐる。之等の人達と打ち寄つての学芸会や通俗講話会などは、子供の社会生活訓練として甚だふさはしい自然的のものである。又地方の名所旧跡の現地教授の機会も得られる。更に共同生活として学校生活よりも一層連続的且つ有機的となり、秩序の良習慣を得、自治自活の自然的訓練が行はれる。一日僅々五六時間の少時を以てしては真の教育の施されようがない。四六時中彼等と寝食を共にし、渾一融合して家庭的の温き美しき情趣の味はれる處に於て不識不知の間に行はるべきものである。又機会と必要こそ教育徹底の鍵であることを知らしめる。其ののんびりとした自然の自教育が滞りなく行はれて、チャンスメソッドやケースメソッドといふのは真実臨海生活に於て体験したものの、みの言ひ得る言葉であることを思はしめる。

上の記述からも分かるように、自然研究や、「地方の名所旧跡の現地教授の機会も得られる」「秩序の良習慣を得、自治自活の自然的訓練が行はれる」点などに意義が見出されていた。また、とりわけ、旅行先の地域住民との交流を通じた「社会生活訓練」の機会や、教員と児童とが「四六時中彼等と寝食を共にし、渾一融合して家庭的の温き美しき情趣の味は」う機会として捉えられていた点が注目される。このように、附属小学校では、心身の健全な発達のほか、児童の体験的な学習や地域住民との交流を通じた社会生活の実践、共同生活による自治訓練など、多様

な教育上の意義を見出して臨海教育を企画していたといえる。

さらに、中田は「殊に教師が児童生活の研究の機会を得る点から眺めても絶好の機会だと思はれる。今単に毎日の身体検査に依って得た数量的方面からのみ考察しても一部の外面観ではあるが猶ほ其効果を明瞭に物語るものがある。」と述べ、臨海教育を、教員が児童生活を研究する場とも位置付けていた。24時間の協働生活がなされる臨海教育ならではの意義といえる。なお、教員として、中田をはじめ、訓導11名、県学校衛生主事1名が参加していた。また、訓導らは、庶務、水泳、衛生・娯楽、炊事、会計、記録等の分掌を持ち、組織的な運営がなされている⁴³。

次に、参加児童の実態から、附属小学校の臨海教育の特徴を検討する。臨海教育の募集時には、全校児童の5分の1に該当する約100名から申し込みがあったという。その後、参加者の選定を行い、実際に「林間学校」に参加した児童は、附属小学校の3年生から6年生まで計52名であった。その内訳は、3年生13名（男児7名、女児6名）、4年生9名（男児9名）、5年生16名（男児12名、女児4名）、6年生14名（男児6名、女児8名）の合計52名（男児34名、女児18名）であり男児の参加者が多めであった。参加者の選定においては、学校衛生主事及び校医による「身体検査」を通じて参加者を決定している。結果、10名の児童が参加不可となった⁴⁴。具体的には、耳の疾患のある児童4名や腸に疾患のある児童2名のほか、海浜生活に適さない「薄弱」の児童2名も含まれている。身体虚弱などを参加の要件とせず、健康上の理由から10名を参加不可にするなど、比較的健康的な児童を対象としたか、もしくは健康的な児童と虚弱児童が混在していた可能性が高い⁴⁵。

また、参加費用は10日間で7円と当時として高額であり、富裕層の児童が中心であったと考えられる⁴⁶。『富山新報』の記事でも、「児童の家庭は大部分上流であって」と報じており、参加者は裁判所長、軍少佐、病院長のほか「実業家方面でも濟々たる家庭の愛児等を網羅してゐる」という⁴⁷。さらに、同じ記事では、参加児童が「坊チャン嬢チャン育ち」であり、附属小の教育方針が「誤つた自由教育主義である」ため、効果を疑問視する声も掲載された。実際、保護者からは、「児童に用ひしむる藁布団を吟味して貫はぬと子供の体が痛むまいかと案じ」る声が出たり、「夜小便には是非教員の附随を希望したもの」「夜間だけ別に宿泊せしむるといふ誤連中も少なかつた」と報道されている。これらの批判からは、大正期の自由主義的な新教育や、この時期に試みられ始めた新しい教育活動である「林間学校」に対する疑念があったことも窺える。

以上、教育目的、臨海教育に見出した教育的意義、参加児童の身体的・経済状況などから総体的に考えると、附属小の臨海教育は虚弱児童の養護中心の実践とは異なるものであった。それは、心身の積極的鍛錬や、自然生活を通じた体験的な学習、協働生活や社会生活を通じた自治の実現など、幅広い教育目的をもつ総合的な学習としての性格が強い実践であったといえる。

(2) 師範附属小の臨海教育における活動

つづいて、臨海教育の活動を検討し、その特質を分析する。大正期の「林間学校」、とりわけ欧米の実践をモデルとした「林間学校」は、「運動」「栄養」「休養」の3種の活動を柱としてプログラムを構成することが多かった⁴⁸。附属小学校の臨海教育の活動はどのようであったのだろうか。その日課を示せば表1のようであった。

表に示した活動の内、臨海教育の中心的活動は水泳練習であった。水泳練習は、参加児童を5・

表1 富山県師範附属小学校「臨海教育」日課

時間	活動
6時	起床
7時	朝食、校医の診療（体温・脈拍）
8時～9時	自習
9時	水泳練習
10時半	間食
正午	散歩及び運動、昼食、午睡
14時～15時半	体重測定、水泳練習
16時	間食
17時	入浴
18時～20時	夕食、散歩及び運動、体温・脈拍測定
21時	就寝
21時半	消灯

注、『富山教育』第94号（1921年）記事より作成。

6年生男児、3・4年生男児、女子児童の3グループに分けて実施した。報告によれば、当初は、泳げる児童は比較的に少数であったという。水泳の様子は、以下のように報告されている⁴⁹。

指導者は先づ一隊を率ゐて関節運動をさせて水中に導く。観海流の泳法によつてその泳ぎ方を指導した。第二の指導者は次の一隊を率ゐて同様に指導する。汀に打寄する波と戯むる者もあれば、大ボールにつかまつて沖合に浮び出るものもある。一方には浮箱に蜷集し、他方には飛込台に群がる。彼らの水中活動は只嬉々として時の移るを覚えなかつた。

十日間の練習は大日本海征服の感が彼らの自信であつた。男の子等は大半泳ぎ得る様になつた。幼稚な子供や女の子も恐ろしかつた海が面白いものになつた。

上の記述からは、観海流の泳法の練習や、水遊びが中心であつたことが分かる。また、多くの児童が泳げるようになったほか、同記事では、「九十分の遠泳に耐えて余裕尚綽々たるものがあつたことも報告されるなど、長時間の遠泳を達成した児童もいた。

さらに、9日目には水泳大会も実施されている。プログラムは、「旗取り」「源平鬼事」「二百米」「輪くぐり」「野外デットボール」「ボール送り」「源平場所割」「綱引」「源平相撲」「水中徒歩競争」「遠泳」「城攻め」「桃拾い」等で構成され、水中での競技・遊戯のほか、陸上での競技・遊戯も実施された⁵⁰。水泳大会の様子は、『北陸タイムス』でも「大会は愈々茲に始まりました、先づ「遠泳」では尋六の山本健二クン■九十分のレコードをつくり、既に雨晴らし付近へ押し行つて余裕尚綽々たるものがあつたけれど監督者の方で根気負して船へあげ、吉田和一郎、久保田直信、今村清春などの少年は何れも八十分乃至九十分を泳いで元気毫も衰へず、一方には「桃拾い」「筏落とし」「水中徒歩競争」濱では相撲、駆くら、綱引などが演ぜられ、歓呼喝采陸をゆる

がし海を圧して起こる、斯うして大会も終わりました」と報道されている⁵¹。周知のように、虚弱児童向けの養護中心の「林間学校」では、海水に浸かる海水浴が推奨されたが、長時間の遠泳や競技が実施されるなど、活動内容は大きく異なっていた。また、水泳練習や水泳大会の実施状況からも、参加者の多くが虚弱児童ではなかったことが推察される。

その他の日課としては、表1に示したように、午前中に短時間の自習（学習）を実施したほか、庭球や野球などの運動、十六武蔵、トランプ、蓄音機、唱歌などの休養的な活動、校医の診療、体重測定、検温、脈拍の測定など衛生的な活動も実施されている。

学習の方針としては、「温かい打解けた生活、そこから湧く純美人間味を掬って教育にしたい」とも述べており、「鹿爪らしい講話や、画一的な復習の強要は企てなかった」という。実際には、「早朝三脚を持ち出して写生に没頭するもの、家庭への通信に畢生の鉛筆を振ふもの、日誌をものするもの、好きな書物を繕くもの」があり、「思い思いに籠めた全我の力は素晴らしい成績を生んだ」のであった⁵²。臨海教育の参観者は、その様子を次の様に報告する⁵³。

朝の水泳が始まるまで少年と少女は大抵書物に読みふけりました。彼らの或ものは三脚をかついでスケッチに出かけました。又或ものは親しい父と母と姉と兄との許に海の報せの小さな葉書の文句を書きつけました。出来上つたスケッチや又は短い葉書の文句は到底大人の王国に住んでゐるものにとつてうかゞひみることも覗きみることも許されなかつた程の天真と真面目さと力一ぱいにみちてゐたものでありました。

これらの記述や報告からは、参加児童らが思い思いの学習活動を展開していた様子が窺える。大正期には受験競争が激しくなり、過度な学習を課すことに批判が集まっており、「林間学校」においても、児童の教科学習を制限することが奨励されていた。富山県内でも、1913年3月に「小学校課外教授ニ関スル件」（「教第383号」）が通牒され、「中等学校入学志望者ニ對シテ課外教授ヲナスコトハ弊害尠カラス候」として、1週間に2時間以上の課外教授を禁止するなど、受験準備のための教育が制限されていた⁵⁴。また、同年3月の通牒「教第580号」によれば、教第383号は「児童ノ負担重キニ過キ為メニ心身ノ發育ヲ害スル等ノ弊害ヲ認メ」たため、これを制限する趣旨で通牒したという⁵⁵。同時期には、富山市内の小学校長の談話として「小学校の夏期休業は云ふまでもなく児童の体育を主とすべきもので徒らに学課をいつものやうに八釜しく詰め込むべきものでないことは今更言ふ程の問題でもない然るに世間には往々此見易い道理を辨なへい（ママ）で無暗に児童智力に就て鹿爪らしいことを言ひ立てる人がある」とも報じられており、夏期休業は、学科の学習よりも、体育や健康増進に適した季節と考えられていたことが分かる⁵⁶。附属小の臨海教育でも、同様の方針により、教科学習ではなく、児童の主体性に任せた学習活動が展開されたと考えられる。その他、衛生・健康関連の活動としても、学習的な効果が期待された。たとえば、「身体検査」についても、児童が自分の身体について、特に体温や脈拍や体重に関する知識を体験的に学ぶことができるなど「彼等生涯の効果」を得る事ができたとする⁵⁷。

食事については、楽しく食事を摂ることや、食事の配膳などを通じて体験的に学ぶことを重視していた。その様子を『北陸タイムス』は以下のように報じている⁵⁸。

電灯の光に照し出された卓の上のお菜皿、七十餘人が夫々定め席へつきました、先生もお客サンもご一緒に「おあがりなさい」と皆一同お辞氣をしてお箸をとります、お櫃の近くに席を占めた者は遠い所の者のご飯をよそつてあげますと、その飯盛の者は亦、お汁鍋に間隔があるので、鍋に近い人から汁を汲んで貰へます、斯くて各自のお口は相霽いなのです、一日の面白かつたことどもを共に語りながら、ご飯は極ゆつくり食べますが、すんだらグスグスしてみませんテンでにお茶碗やお皿を洗つて来て、卓中へ、布巾を掛けて始末をします、

また、『富山教育』の記事では食事の献立も報告されているが、カロリーや栄養価などは掲載されておらず、主に準備の参考とするための金額が掲載されている。また、間食の内容もせんべいやビスケットなどの菓子類であった。虚弱児童向けの「林間学校」では、カロリーや栄養価に留意した献立や、間食で牛乳を提供するなど栄養の補給が推奨されたが、そうした性格は強くなかったといえる。その他、期間中の行事として、雨晴遠足、島尾遠足、お話会、引網（試食会）、國泰寺遠足、スケッチ展覧会、茶話会などが実施されるなど、児童の生活が単調とならないよう工夫していた⁵⁹。

(3) 「林間学校」の成果報告

臨海教育の成果としては、先の水泳大会における児童の達成状況の報告に加え、実施後に2回健康状態の調査を実施し、結果が報告されるなど、主に身体的な成長に注目していた。具体的には、実施から11日後の8月11日、さらに10日後の8月21日に、体重や体温、脈拍の調査を実施している。体重を例に取れば、第1回目は45名の児童が参加し、男児は体重増33名、体重減3名、女児は増12名、減5名、男女45名の体重の総増加量は9,321匁、平均207.13匁（約780グラム）であった。第2回目は、48名の児童を対象に計測がなされ、男児は体重増31名、体重減1名、女児は増13名、減3名、男女48名の体重の総増加量11,666匁、平均378.64匁（約1,420グラム）であった。報告では「何れも良好」としているが、短期間の調査のため参考として付すとしている⁶⁰。その他、記事中では、児童の体験的な学習の実現や、児童と教員の交流が促進された点も成果として挙げている。

また、臨海教育の成果は、新聞でも報道された。たとえば、山崎学校衛生主事の談話として、多いものは350匁、少ない児童でも100匁ほど体重が増加したことが報じられた⁶¹。ただし、実施期間については改善の余地があったようで、山崎は、「期間は少くとも三週間位継続したならば立派な効果を挙げるであらうと今更期間の短かつた事を悔やみます」とも述べている。期間の短さを課題としたこと、また、3週間以上を理想と考えたことが分かる。『高岡新報』でも、山崎の談話として「十日間の臨海教育の結果各児童の体重が平均二百匁増加した」ことを報じ、「附属小学校の児童は高級官吏、富豪等の上流家庭の子女が多く普通の小学校の児童に比せば体質は余り良くないのが多いから此体重の増加は全く適當の運動に依る効果である」として臨海教育の意義を主張した⁶²。さらに、海水浴で風邪を引いた者がいなかったことを根拠に、児童の皮膚が鍛えられたことや、食欲が増進したことも強調された。加えて、食器を自ら洗い、衣類も自ら洗濯したほか、日用品の管理も行うなど、規律的生活が実現できたことも主張し「平素の食器を洗ったことが無く身廻りは女中や書生委せにしてゐた児童には多少苦痛であつたであらうが遣らね

ばならないから斯る習慣を馴らした上に於ても是れ亦効果を認めた」と述べている。

以上、附属小の臨海教育においては、水泳技術の向上や心身の鍛錬を主目的とする水泳練習や海浜での競技をプログラムの柱としていた。さらに、自然環境下での自由な生活を通じた自主的な学習、協働作業を通じた自治的生活の向上が目指されている点も特徴であった。このように、同校の臨海教育が、自然生活を通じた様々な体験の機会を活用し、児童の総合的な学びと成長を目指す実践であったことは、その主たる活動の内容や成果報告からも裏付けられるといえる。

3. 富山市内の公立小学校による「臨海教育」

(1) 臨海教育の概要、目的、参加児童の実態

本節では、富山市内の各公立小学校が合同で実施した「臨海教育」について考察する。資料としては前節と同じく主に『富山教育』第94号掲載の記事を参照して實際をまとめる。

はじめに、市内小学校による臨海教育の概要を確認する。市内小学校の臨海教育は、1921年8月2日から11日までの10日間にわたり、氷見郡太田村の太田村小学校を宿舎として開催された。この臨海教育は、富山市内の全小学校8校が連合して実施したものである。参加した小学校は、総曲輪小学校、西田地方小学校、星井町小学校、愛宕小学校、五番町小学校、清水町小学校、八人町小学校、柳町小学校の8校であった。また、各小学校の児童は、総曲輪小・西田地方小を緑組、星井町小・愛宕小を赤組、五番町小・清水町小を青組、八人町校・柳町校を黄組と合計4組に組織されている。報道によれば、「富山市教育会主催に係る臨海教育」とあり、富山市教育会が主催し、市内の各小学校が参加したと考えられる⁶³。

開催時期を見れば、附属小学校の臨海教育終了後すぐに開催されており、また宿舎も同じ太田村小学校を利用していた。記事には「其他附属小学校の設備を多少改造して使用した」とあるほか、新聞でも、当初は呉羽山の東西に各1ヶ所ずつ設置する予定であったが、県の補助費150円のほかは、市として「経費の支途に苦しむ」とも報じられている⁶⁴。同じ新聞記事によれば、師範附属小の設備を充当できないか市校長会から附属小に照会したともあり、附属小が設置した設備を利用する形で、経費を安く抑えて実施する計画であったと考えられる。

市内小学校が連合して臨海教育を実施した目的については、「児童の健康増進を期し、兼ねて規律正しき生活に慣れしめ、自然を愛するの美感を養ふにあり」と報告されており、主に児童の健康増進、規律正しい生活の実現、美感の養成などを目的としていた⁶⁵。

臨海教育に参加した児童はどのような児童だったのであろうか。報告によれば、参加者は各小学校の5・6年生児童合計31名であった。募集時には定員の40名を10数名超えたと報道⁶⁶されていたが、選抜により31名に絞ったと考えられる。また、各小学校から2～6名ずつの参加者であり、初めての試みということでごく限られた児童が参加していたといえる。参加費用は附属小と同様の7円であり、高額な費用がかかった。このことから、附属小と同様に比較的富裕層の児童が参加したと考えられる⁶⁷。また、報告には、参加者の児童は「比較的薄弱なものを選抜」⁶⁸したとの記載があるので、一定数の虚弱児童が参加した可能性もある⁶⁹。

(2) 臨海教育の活動内容、成果

市内小学校の臨海教育の活動内容は表2のようであった。表に示したように、水泳の練習を柱

とする日課となっている。水泳場は、附属小の施設に類する形態の施設を設営しており、二重に網を張るなど児童の安全に配慮した設備であった。水泳の練習は、10時と15時の2回実施された。ただし、練習方法は特に定めず、自由に泳ぎの練習をする方針であった。その様子を報告では以下のように記載している⁷⁰。

表2 富山市内各小学校「臨海教育」日課

時間	活動
6時	起床、寝具の整頓、掃除、朝食
10時	水泳、昼食
12時半～14時	午睡
15時	水泳
17時	入浴
18時	夕食
20時	就寝

注、『富山教育』第94号（1921年）記事より作成。

練習方法は別に定めない、各自勝手である、泳ぐ者、飛込む者、砂遊び、蟹掘り、人手を拾ふ、貝を掘る者。さては鰻、河豚等の小魚漁りに余念もない。最初二三日は多少泳ぎの心得あるものでも、第二線内で恐る恐る練習する泳げないものは浮囊に縋つて練習して居たが、五日六日目頃になると泳げるものは大抵二線外へ出る、浮囊組も浮囊を離れて泳げるやうになつた。非常に早い熟練である。

児童らが自由に練習する様子や、当初は泳ぎが苦手な児童が、練習を経て上達する様子が描かれている。また、児童の上達を教員らが評価していたことも分かる。さらに、最終日近くの9日目には、水泳大会が実施された。その様子は以下のものであった⁷¹。

午前十時陸上競技の相撲から始まる。天幕の下に綱引きの綱を輪にして砂を盛つて急造の土俵が出来た。青組緑組が東赤組黄組が西で、二人抜き三人抜き五人抜きと番組が進み両方共熱狂する、それが終ると水中競技となる。水中徒歩、筏落し、飛込速泳ぎ、水中宝拾ひ、水泳競争等、互に優劣を争ひ、プログラムは再び陸上綱引きとなつて終り十二時万歳を三唱して宿舎に帰つた。此の日本水泳競争に於て西田地方校村井の八百間、八人町校石橋の六百間、清水町校の岡田の五百五十間の遠泳ぎは一同をして嘆賞せしめた。

このように、附属小学校と同じく、水泳大会では、水中での競技のほかに、陸上での相撲や綱引き等が実施された。また、水中では「飛込速泳ぎ」や「水泳競争」など、「互に優劣を争」う種目が中心であった。さらに、児童によっては五百五十間から八百間（約1～1.5km）と長距離を泳ぎ得たものがいたことが分かる。児童の様子については、「九日目の水泳大会には、最初泳

げなかつたものでも皆泳げるやうになつて、少しも泳げないものはたつた一人で、上手なものは水泳場から島尾近くまで十二三町も泳いだ。」とも報告している⁷²。これらの記述からは、多くの児童が泳げるようになったこと、遠泳ができることを大きな成果として教員らが捉えていたことなどが分かる。附属小と同じく、市内小学校の臨海教育の水泳も、虚弱児童向けの「林間学校」の海水浴とは異なり、技術の向上や心身の鍛錬に主眼を置いていたといえる。

その他の日課としては、学習や運動・遊びに関する活動が実施された。学習に関わる活動としては、家庭への通信を記入させ、綴り方の実地練習とした。また、夏期休業日誌の記入なども行われている。運動・遊びに関する活動としては、屋外では庭球・野球・フットボール、ブランコが行われ、室内では闘球、将棋、腕相撲、鬼ごっこ、ハーモニカ、読書などが実施された。この他、児童の健康状態を確認するため、毎日体温と脈拍を測定もおこなわれている。食事については、「充分注意して準備した」とあるが、栄養価やカロリーについては特に明示されていない⁷³。

新聞報道によれば、富山市内の8校の小学校の就学児童9,921名の栄養状態は、「栄養」甲が2,745名、乙が5,956名、丙220名であった⁷⁴。また、1921年の「児童身体検査」の結果でも、7歳から12歳の男児4,407名中、「栄養」丙は87名（約2%）、女児4,294名中、丙は104名（約2.4%）と栄養状態の良くない丙の児童は少数であった⁷⁵。このことから、児童の栄養摂取や食生活の改善については、臨海教育の主要な教育目的となっていなかったと考えられる。

これらの日課に加え、市内小学校の臨海教育でも種々の行事が実施された。具体的には、開催地周辺の地理の観察、島尾遠足、國泰寺遠足、雨晴遠足、日出見学、お話会、茶話会などが実施された。また、雨天のため中止となったが、競技会の開催も予定されていた⁷⁶。たとえば、遠足の様子は「スケッチブックを携へて雨晴に向ふ。十五町の道は暫時で達す。朝風の静かな海に無数の帆船朝日に映え岩間に点在し岩上に立ちて釣する人、静かに豊かな煙を残し岩と岩とを優々と縫て行く汽船は將に一畫の絵である。一同は熱心に鉛筆を走らす。そがすむと貝類海草の採集して帰路辰口の古墳を見る。」と報告されている⁷⁷。スケッチ、海草の観察・採集、古墳の見学など、種々の体験的学習の機会を設けようと意図していたことが、この一文からも窺える。

臨海教育の成果については、水泳の熟達や学習上の成果に加えて、体重の計測結果を掲載しており、やはり身体の変容に注目していたと考えられる。具体的には児童の総体重の変化や、体重の増加量の平均、増加及び減退した児童の人数などが掲載された。ただし、体重については報告では詳細に触れていない。体重の増減を見ると、増加した児童が21名、減退した児童が10名であり、減退した児童が一定数存在したために、本文で触れられなかったと推察される⁷⁸。

このように、富山市内の各小学校による臨海教育も、技術の向上を目指す水泳練習や鍛錬的な海浜での競技、遠足などの児童の体験を通じた学習等々を活動の柱としていた。附属小の実践と同様に、大正期に奨励された養護中心の「林間学校」とは異なり、児童の総合的な学びや成長を目指す実践として位置づけられるといえる。

4. 附属小及び市内各小学校の臨海教育の特質と意義

ここまで、附属小及び富山市内各小学校の臨海教育の実際を明らかにしてきた。このような、両実践の特質や意義はどのような点にあるのだろうか。最後に、両実践の特質と意義を検討する。

まず、目的や活動内容から考えると、両実践とも水泳練習や海浜の競技を中核に位置付けるとともに、近隣の史跡や自然環境の見学、植物の採取、スケッチなど、自然環境や地域に特有の各種教材を生かした活動が展開されていた。欧米型の実践を一定のモデルとして実施しつつも、独自性や固有性をもつ「林間学校」としての性格が確認できるといえる。

また、活動状況や成果が幅広く共有された点も、両実践の特徴として挙げられる。本論文で分析の対象とした教育雑誌『富山教育』で実際と成果が紹介されたほか、『富山日報』『北陸タイムス』等の地元紙でも、実施準備から終了後の成果まで定期的に報道されていた。このため、臨海教育への注目が集まると共に、その成果が地域内で広く共有されることになった。さらに、両実践には多くの参観者が訪れていた。たとえば、附属小学校の報告では、参観者の人数も掲載されている。それによれば、10日間の間に保護者23名、教員52名、学事関係の官吏22名、記者5名の計102名が訪れており、一定の注目を集めていたと考えられる⁷⁹。特に、教員の参観者が多く、県内の他の小学校にもその実践の様子が伝えられたと推察される。

附属小主事の中田も、臨海教育を実施した感想として「今後何等かの方法を以て或団体等が適當の海岸に此種特別施設、例へば県営臨海教育場の如きものの実現を衷心希望するものである。」と述べ、県営の「林間学校」の実施場所を開設することを主張するなど、その実施の必要性を実感する機会になったといえる⁸⁰。同様に、市内各小学校の報告でも「要するに今日は臨海教育の効果云々を論ずる場合でなく、如何にせば一層の効果を挙げ得べきかが問題である。」と述べ、さらなる拡充の必要性を主張している⁸¹。結果、富山県内では、1921年度の臨海教育を契機として、翌年度以降は、さらに多くの学校で「林間学校」が実施されるようになった。たとえば、富山県学務課による『社会教育に関する調査 第2輯』に掲載された夏期体育施設の内、1922年度に実施された臨海教育・林間教育をまとめると表3のようになる。

表からも分かるように、1922年度には、富山県内の各小学校により、一定数の臨海教育・林間教育が実施されるようになっていた。また、射水郡二丸小学校長は、同校が1922年に実施した林間教育について、「従つて実施具体案の作製には随分困難を感じた。計画立案にも苦心した。或は書籍により、或は先輩実施学校への照会により、職員会を開催すること数回、漸くにして少々安心するに足る実施案を得て父兄の諒解を求めた」として、21年度に先行的に実施した学校の教員から助言を求めたことを述懐している⁸²。さらに、附属小学校においては、1922年度以降も実践を継続したほか⁸³、富山市内の各小学校の中にも1922年度乃至は23年度に、単独で「林間学校」を実施する学校が出てきた⁸⁴。また、附属小学校では1923年の「臨海教育」を「臨海児童大学」の名称で実施し、内容もさらに体験的な学習としての性格を前面に出すなど、1921年度の実践を基礎により計画が拡充されている⁸⁵。このように、両実践を含めて、1921年度に複数校が実施した試行的実践は、富山県内における「林間学校」発展の契機となった実践として位置づけることができ、同県の「野外における教育」の史的展開においても重要な実践と考えられる。

また、国内の「林間学校」の発展史における両実践の位置付けはどのようであろうか。「はじめに」でも述べたように、大正期の「林間学校」は、貧困層の虚弱児童向けに、養護を主とした教育活動として実施することが政府により奨励され、同時期の大都市圏では、虚弱児童向けの大規模な実践が実施されている⁸⁶。一方で、富山市内の両実践は、予算不足により参加者が富裕層

表3 1922年度に臨海教育、林間教育を実施した学校一覧

番号	種別	学校所在地	学校名	目的	場所	期間	参加者	指導者数	経費	出所	児童負担		
1	臨海教育・聚落	上新川郡	舟倉新小学校	心身鍛錬	上新川郡濱黒崎村	3日間	40名	3名	100円	校費	30銭		
2		中新川郡	下條小学校	体育向上	中新川郡濱黒崎小学校	2日間	244名	6名	4円80銭	校費			
3		下新川郡	宮川小学校	健康増進・精神鍛錬	上新川郡大村海岸	2日間	60名	3名	180円	不明			
4			池多小学校		射水郡堀岡村海岸	1日	150名	6名	不明				
5		婦負郡	八尾小学校		射水郡四方町海岸	3日間	80名	4名	不明	自費	1円20銭及び米3升		
6		水見郡	上余川小学校		水見郡水見町海岸	2日間	70名	2名	不明				
7			上伊勢小学校		水見郡水見町海岸	7日間	80名	7名	5円	校費			
8			中田小学校		水見郡女良村海岸	1日	150名	4名	3円	寄付			
9			第一水見小学校		水見郡水見町海岸	7日間	488名	17名	58円	校友会費			
10			太田小学校		水見郡太田村海岸	6日間	179名	3名	5円	校費			
11			神代小学校		水見郡太田村及鳥尾海岸	3日間	40名	3名	不明				
12			東礪波郡		井波小学校	水見郡鳥尾海岸	1日	50名	3名	35円	自費	※70銭	
13					般若小学校	水見郡宮田村海岸	2日間	50名	2名	15円	自費	※30銭	
14					林小学校	水見郡太田村及鳥尾海岸	5日間	20名	3名	60円	校費・自費	不明	
15					福岡小学校	射水郡伏木町海岸	5日間	200名	7名	120円	自費	※60銭	
16		高岡市	高岡高等小学校		水見郡阿尾村海岸	5日間	20名	2名	4円	校費			
17	下新川郡	生地小学校	下新川郡越湖濱松林		7日間	50名	1名	不明					
18	林間教育・聚落的早起会	射水郡	二丸小学校		西礪波郡安居寺	7日間	80名	4名	216円	自費	2円70銭		
19		砂子谷小学校	校区内北山溜池附近	7日間	200名	4名	不明						
20		東礪波郡	赤丸小学校	校区内浅井神社	休暇中週1回	200名	6名	不明					
21		富山市	西田地方小学校	中新川郡立山寺	7日間	15名	2名	不明	自費	4円			
22		東礪波郡	若林小学校	校区内の各神社	25日間	510名	11名	不明					

注1、富山県学務課『社会教育に関する調査 第2輯』（1923年）より作成。

注2、地名、学校名等の表記は『社会教育に関する調査 第2輯』の記載に従った。

注3、「児童負担」欄の※印は、経費が総経費であり、全額を児童が負担したと仮定して算出した。

注4、22番は「聚落的早起会」と記載されているが、名称や期間、人数から通学式的林間教育に類する実践と考えられる。

に限定されたことなどの諸要因により、主として健康な児童を対象に、幅広い教育的な目的をもって実施される結果となった。とりわけ、本論文で確認したように、実際の活動としては、毎日の水泳のほか、最終日には遠泳や海浜・海中での競技を中心とする水泳大会を実施するなど、鍛練的な意味をもつ活動が主であった。さらに、自然の研究、史跡名勝への遠足、引網見学など、実施地の地域的特色を生かした体験学習も展開されている。以上の活動内容から、両校の臨海教育は、虚弱児童向けの「林間学校」において特徴的な「運動」「栄養」「休養」の3つを柱とする養護を主とした実践ではなく、心身の鍛錬、体験を通じた学習、自治生活の向上に重点を置く実践であったと考えられる。ただし、午前早い時間に学習関連の活動を実施し、その後水泳や運動を配した日課や、成果として体重の増減に注目する点は、虚弱児童向けの「林間学校」とも共通する。このように、両実践とも、日課の大枠や成果報告等は欧米型の実践をモデルとしつつ、内容においては鍛練的活動や、地域性を生かした活動を主とするなど、同時代の「林間学校」と比較して一定の独自性をもつ教育活動としての性格を強く確認できるものといえる。

おわりに

本論文は、明治後期から大正期にかけて、富山市内の小学校が実施した「野外における教育」や「林間学校」の実態及び特質を究明するものであった。その要点を示せば以下ようになる。

富山県内では、明治中期から後期にかけて、遠足運動、郊外教授、水泳、学校園など、「野外

における教育」の経験が蓄積されていた。また、大正期における夏期休暇中の学習・運動を目的とする野外での教育活動など各種の実践が展開されつつもあった。さらに、新聞報道等を通じた自然環境の教育的効果への注目の高まりや、県教育界における児童中心主義的な方針の採用、「林間学校」やその代替となる活動の必要性の共有など、試験的な「林間学校」を実施するに至る基盤が十分に形成されていた。さらに、1921年度には、富山県が「林間学校」の実施を奨励し、補助金の支給に踏み切った。この結果、附属小をはじめ、県内の複数校が、臨海教育を試験的に実施したのであった。

実際の活動としては、附属小及び市内各小学校の臨海教育とも、毎日の水泳練習のほか、遠泳や海浜での相撲・綱引き、水中競技から成る水泳大会を実施するなど、心身の鍛錬を中核とするプログラムであった。さらに、自然の研究、史跡名勝への遠足、引網見学など、実施地の地域的特色や教材を生かした体験学習も展開された。この時期の虚弱児童向けの「林間学校」において特徴的な「運動」「栄養」「休養」の3つを柱とする養護ではなく、鍛練的な体育や、体験を通じた学習を主眼とする実践に位置付けられるといえる。一方で、午前中に学習を実施し、午後に水泳や運動を配した日課の大枠や、体重の増減を成果として挙げる点は、虚弱児童向けの「林間学校」とも共通する。このように、両実践とも、日課の基本的な枠組みや、成果報告は欧米型の実践をモデルとしつつ、内容においては地域性を生かした活動を展開するなど、一定の独自性をもつ「林間学校」としての性格を確認することができた。

さらに、両実践には、多数の参観者が訪れると共に、活動状況や成果が地元紙、教育雑誌に掲載されるなど、その成果は地域内で広く共有されていた。そして、翌年度以降も附属小の実践は継続・拡充されると共に、富山県内の各小学校においても、臨海教育・林間教育を試みるようになるなど、「林間学校」の実施数も増加することとなった。以上のように、1921年度の試行的な実践は、富山県内の「林間学校」の量的・質的な発展の契機として、同県の「野外における教育」の史的展開においても大きな意義をもつものであったと考えられる。

なお、昭和初期には、英国式の社会的な学校衛生から米国の影響を受けた学校中心の学校衛生への転換が全国的に見られる。富山市内においても学校衛生関連の施設や活動が拡充し、「林間学校」で実施された各種の活動が学校内で恒常的に実施されるように変容した。これら学校内での衛生・体育的な施設や教育活動の充実に伴い、「林間学校」の性質がいかに変化したかの検討は、今後の課題とする。

【謝辞】本研究は科研費19K11627及び22K11688の助成を受けたものである。また、本研究の調査に協力をいただいた富山県教育記念館及び富山県立図書館の職員の方々に感謝する。

註

- 1) 大正期の林間・臨海学校は、実施形態により多様な名称が付されており、「常設型」「宿泊型」「通学型」の3種に分類される。常設型は、高原等に実際に学校を建設したものであり「養護学校」に近い。また、宿泊型は夏期休暇等に実施される宿泊学習であり、通学型は、居住地近くの河川等で簡易的に実施された。本論文では、これらの総称として「林間学校」と表記する。

- 2) 大正期の小学校では、「野外教育」という用語はあまり使用されず、「屋外教育」「戸外教育」等と呼称された。本論文では、現代の野外教育とは区別し「野外において組織的、計画的に、一定の教育目的を持って行われる教育活動」の総称として「野外における教育」を用いる。
- 3) 拙稿「明治後期から大正期の「野外における教育」とその特質—海外の「林間学校」の紹介を中心に—」『早稲田大学教職大学院紀要』第13号、2021年、1-14頁。
- 4) 「林間学校奨励補助ニ関スル件」『議員回付建議書類原義（四）』（国立公文書館：本館-2A-029-00・請願00046100）。
- 5) 文部省の調査によれば、建議の前の1918年における林間・臨海聚落の実施箇所数は136箇所、1919年は198箇所、1920年は205箇所であったが、建議の可決後の1921年は320箇所、1922年は582箇所、1923年は940箇所と全国的規模で急速な量的拡大を遂げたことが分かる（文部大臣官房学校衛生課『夏季に於ける体育的施設の状況調査』1926年、8頁）。
- 6) 拙稿「大正期における「林間学校」の受容と発展に関する一考察」『学術研究・人文科学・社会科学編』早稲田大学教育・総合科学学術院教育会、2015年、387-407頁。
- 7) 主要な研究は次の通り。山田誠「初期の林間学校の性格について」『神戸外大論叢』第27巻4号、1976年、105-124頁。芦田千恵美「大正～昭和初期の養護学級に関する一考察」『日本大学人文科学研究研究所研究紀要』37巻、1988年、187-202頁。桐山直人『茅ヶ崎の小さな学校』草土文化、1999年。中村満紀男編著『日本障害児教育史【戦前編】』明石書店、2018年。
- 8) 主な研究としては次の論考がある。渡辺貴裕「<林間学校>の誕生—衛生的意義から教育意義へ—」『京都大学大学院 教育学研究科紀要』第51号、2005年、343-356頁。加藤理「伊勢堂山林間学校の開校-仙台児童文化活動の諸相（12）」『論叢児童文化』第42巻、くさむら社、2011年、8-16頁。加藤理「伊勢堂山林間学校と児童文化活動—仙台児童文化活動の諸相（13）」『論叢児童文化』第43巻、くさむら社、2011年、9-16頁。平沢信康「大正後期の群馬県における林間学校の誕生：前橋市立敷島尋常小学校と桃井尋常小学校による合同開設」『上武大学ビジネス情報学部紀要』第16巻、2017年、1-37頁。平沢信康「群馬県における林間学校の普及と展開：大正末期から昭和戦中期まで」『上武大学ビジネス情報学部紀要』第17巻、2018年、1-47頁。
- 9) 日本野外教育学会『野外教育学研究法』杏林書院、2018年、39頁。
- 10) 富山県教育史編さん委員会『富山県教育史』、上巻、富山県教育委員会、1971年。富山県教育史編さん委員会『富山県教育史』、下巻、富山県教育委員会、1972年。富山県教育記念館『富山県小中学校体育140年の歩み』2011年など。
- 11) 井村仁「わが国における野外教育の源流を探る」『野外教育研究』第10巻1号、2006年、85-97頁。
- 12) 富山県教育史編さん委員会、前掲、1972年、105-106頁。
- 13) 引用にあたり、一部の旧字体や旧仮名遣いは、新字体、現代仮名遣いに改めた。
- 14) 拙稿「明治中期から大正初期の富山県における小学校教育—「野外における教育」活動を中心に—」『早稲田大学教職大学院紀要』第12巻、2020年、17-33頁。
- 15) 清生「戸外運動の奨励」『富山県教育会雑誌』第46号、1913年、1-5頁。
- 16) 「体育奨励」『北陸タイムス』1921年8月5日、1面。
- 17) 「学校々庭開放」『富山新報』1921年7月9日、2面。
- 18) 「試金石の陳列会」『富山新報』1919年8月27日、3面。「夏休み中の高岡各小学校」『北陸タイムス』1920年7月19日、3面。「暑休教育施設」『富山日報』1920年7月22日、1面など。一方、受験準備のため小学6年生が夏休中に教員の私宅で個別教授を受ける事例や、富山市で児童を集めて特別授業を実施する小学校があることを批判する記事も掲載されるなど、夏期休暇の過ごし方が課題とされていた（「休暇にウンと勉強」『北陸タイムス』1920年7月31日、3面。「小学校特別授業」

- 『北陸タイムス』1920年8月2日、3面)。
- 19) 前掲記事、『富山新報』1919年8月27日、3面。
 - 20) 「女学生の登山隊」『富山日報』1919年7月28日、3面。「休暇中の体育施設」『高岡新報』1920年7月17日、2面。「高岡女学生の五箇山登山」『富山日報』1920年7月21日、3面。「海に山に姫達が」『北陸タイムス』1921年7月20日、3面。「高中校の水泳」『高岡新報』1921年7月20日、3面。「神中校でも臨海教授」『富山新報』1921年7月21日、3面。「山へ！海へ！県下各中等学校の夏休み中の体育施設」『高岡新報』1921年7月22日、3面。「一高生の立山登山」『富山新報』1921年7月14日、3面。「いよいよ之からは避暑地の世の中」『高岡新報』1921年7月5日、5面。「南富山駅へ現はれる立山登山者の群」『富山新報』1921年7月20日、3面。「滅切殖えた登山者」『富山新報』1921年7月25日、3面。「海へ行く人々に山へ行く人々に」『高岡新報』1921年7月27日、3面。「探勝客を迎う黒部峡谷の設備」『北陸タイムス』1921年7月28日、5面。「婦人の海水浴」『北陸タイムス』1921年8月9日、3面。「海岸の大賑ひ」『北陸タイムス』1921年8月15日、3面など。
 - 21) 富山県『富山県政史』1929年、447-448頁。
 - 22) 富山県教育史編さん委員会、前掲、1972年、15、41-42、59、96-107頁。
 - 23) 周知のように、大正期に児童中心主義的な教育を実施した成城小学校、成蹊小学校、児童の村小学校などの新学校は、自然環境に注目し「野外における教育」に精力的に取り組んでいる。
 - 24) 富山県教育史編さん委員会、前掲、1972年、67頁。
 - 25) 「夏季休暇の利用に就て」『富山日報』1921年7月9日、1面。
 - 26) 「白砂青松の太田の濱で臨海教育を行ふ」『高岡新報』1921年7月26日、3面。
 - 27) 「臨海教授決定」『富山新報』1921年7月19日、2面。「富山市各校選抜の臨海教育効果顕著」『高岡新報』1921年8月10日、1面（日付に誤植があり8月9日付になっている）。
 - 28) 「小学校の禅生活」『高岡新報』1921年7月21日、5面。なお、同記事によれば、高岡高等小学校は臨海教育ではなく、寺院に宿泊して精神修養と体育と学科の向上を計るという。
 - 29) 中田栄太郎「夏季休業と臨海教育」『富山教育』第94号、1921年、6頁。
 - 30) 「大正八年六月学校衛生主事会議に於ける赤司普通学務局長の訓示要領」『富山県教育会雑誌』83号、1919年、30-31頁。
 - 31) 「暑休存廃是非 夏期学校の特設」『富山日報』1920年7月14日、1面。『高岡新報』でも、休暇後に学力・体力が低下するため、林間・臨海教育の実施が必要と高岡高等小学校長が論じている（「市内小学校で暑中休暇 善用の新しい試み」『高岡新報』1920年7月17日、3面）。
 - 32) 「楽しい暑中休暇」『高岡新報』1921年7月7日、3面。
 - 33) なお、富山県教育会が発行した『富山教育』第94号は「臨海教育号」とも銘打たれており、記事のほぼ全てが富山県内で実施された「林間学校」の報告であった。具体的には師範附属小学校及び富山市内小学校の臨海教育のほか、高岡幼稚園の臨海保育、上新川郡太田小学校の夏季臨海生活、神通中学校の臨海生活、高岡高等小学校の僧庵生活の実践報告が掲載されている。県内の複数の学校で同時に「林間学校」の実施が試みられ、また教育会の雑誌で特集が組まれるなど県教育界においても「林間学校」への注目が十分に高まっていたことを示すものといえる。
 - 34) 附属小学校「臨海教育」『富山教育』富山県教育会、第94号、1921年、7-8頁。
 - 35) 「四方で臨海教授 然し同海岸は頗る不潔」『高岡新報』1921年7月5日、2面。「海は四方か氷見の太田か」『富山日報』1921年7月6日、5頁。
 - 36) 附属小学校、前掲、10頁。
 - 37) 氷見郡太田小学校のことと考えられるが、記事や新聞報道では太田村小学校と記載されているため、本論文では太田村小学校の名称を使う。

- 38) 附属小学校、前掲、9-10頁。
- 39) 同上、7及び14頁。
- 40) 同上、13-15頁。
- 41) 同上、9頁。
- 42) 中田、前掲、1-6頁。
- 43) 附属小学校、前掲、13頁。
- 44) 同上、12頁。
- 45) 一方で、『高岡新報』の報道によれば、山崎学校衛生主事の発言として「附属小学校の児童は高級官吏、富豪等の上流家庭の子女が多く普通の小学校の児童に比せば体質は余り良くないのが多いから」とあり、当時の富山県内では、富裕層の児童の体質が虚弱傾向にあると認識されていたとも考えられる（「児童の体重が平均二百匁殖えた」『高岡新報』1921年8月3日、3面）。
- 46) 附属小学校、前掲、11頁。なお、記事によれば、その内訳は6円が食費、1円が交通費及び雑費であった。また、他に藁布団の代金として1円を徴収している（布団は後で各自に返却）。
- 47) 「附属校の臨海教授は太田海岸で開催」『富山新報』1921年7月17日、3面。
- 48) 拙稿、前掲、2021年、8頁。
- 49) 附属小学校、前掲、19-20頁。
- 50) 同上、26頁。
- 51) 「臨海教育記（六）」『北陸タイムス』1921年8月6日、3面。文中の■は判別不能を示す。
- 52) 附属小学校、前掲、19頁。
- 53) 鈴木ゆづる「臨海教育を見て（三）」『富山日報』1921年8月14日、3面。
- 54) 富山県教育会『富山県教育法規』1928年、733-734頁。
- 55) 同上、734頁。ただし、教第580号通牒では、学年末の休暇中は規制の対象外となった。
- 56) 前掲記事、『富山新報』1919年8月27日、3面。
- 57) 附属小学校、前掲、20頁。
- 58) 「臨海教育記（三）」『北陸タイムス』1921年8月2日、3面。
- 59) 附属小学校、前掲、27-29頁。
- 60) 同上、29及び33-34頁。
- 61) 「児童の体重が増えた」『富山新報』1921年7月30日、3面。
- 62) 前掲記事、『高岡新報』1921年8月3日、3面。
- 63) 「臨海学生出発」『富山新報』1921年8月4日、1面。
- 64) 前掲記事、『富山新報』1921年7月19日、2面。
- 65) 富山市小学校「大正十年度臨海教育の実際」『富山教育』第94号、1921年、35頁。
- 66) 前掲記事、『富山新報』1921年7月19日、2面。
- 67) 前掲記事、『高岡新報』1921年8月10日、1面。ただし、7月2日時点の報道では、費用は50銭で不足分は県と市から補助を出す予定であった（「市内小学校の臨海教授」『北陸タイムス』1921年7月2日、3面）。一方で、7月19日の記事では、参加費は7円とあり、財政難により参加者の費用負担を重くせざるを得なかったと考えられる（前掲記事、『富山新報』1921年7月19日、2面）。
- 68) 富山市小学校、前掲、36頁。
- 69) 費用の額から、貧困に起因する虚弱児童ではなく、富裕層の家庭の虚弱児童と考えられる。
- 70) 富山市小学校、前掲、36頁。
- 71) 同上、38頁。
- 72) 同上、36頁。

- 73) 同上、36、37、39頁。
- 74) 「学童身体検査」『富山日報』1921年8月17日、2面。なお、「栄養」は児童の栄養状態を甲・乙・丙の三段階で評価する指標である。
- 75) 富山市『富山市立小学校児童身体検査比較統計表』1921年、1枚。
- 76) 富山市小学校、前掲、37-38頁。
- 77) 同上、38頁。
- 78) 同上、40頁。
- 79) 附属小学校、前掲、34頁。
- 80) 中田、前掲、6頁。
- 81) 附属小学校、前掲、39頁。ただし富山市視学は、財政上の課題から、通学式の「林間学校」を普及させるべきとの見解を示している（前掲記事『高岡新報』1921年8月10日、1面）。
- 82) 鹽谷安太郎「林間教育に関する研究」『富山教育』188号、1929年、15頁。
- 83) 「太田濱のいく日」『北陸タイムス』1922年7月7日、3面。「師範附属の小学生達が今朝太田の濱へ」『高岡新報』1922年7月21日、3面など。
- 84) 「林間学校の効果」『富山日報』1922年8月16日、5面。富山市総曲輪尋常小学校『大正十三年昭和十年十二ケ年 林間学校経営の実際』1936年。他に大山村など山間部の小学校も氷見郡で「臨海学校」を開始したと報道されている（「大山村の児童を臨海生活せしむる」『北陸タイムス』、8月1日、5面。「仏生寺児童の臨海教授」『北陸タイムス』1922年8月19日、3面）。
- 85) 「暑中休暇を利用して臨海児童大学」『富山新報』1923年7月15日、2面。
- 86) 拙稿「大正末期の東京市における林間学校—「御殿場夏期林間学校」と「佛蘭西寄贈病院」—」『早稲田教育評論』第22巻、2008年、23-42頁。